サンジカリズム アナキズム 理論誌 第二次発行
黒旗の下に
発行所 由由思想研究会 川崎市新丸子東1丁目833

労働と解放

発行所 労仂と解放社
神戸市灘区灘北通四ノ三九（高島）方
発行者 平沢貞太郎
編集者 高島洋
定価 二十円

禁欲主義からの解放

今年の春斗が妥結した時われわれの組合では恒例により、「インター」を合唱した。その後、春斗総括の職場会議で、ある若い組合員Iが「毎年毎年、春斗がいやらしくなつて来るような気がする。「インター」が今年ほどそらぞらしく感じられたことはない。「立て餓えたるものよ」なんつていつても、わが組合には餓えるものなんていなじやないか。」

Iは何回か執行委員に選ばれたこともある真面目な活動家である。それに対してやはり若い女子組合員F―彼女は雑誌の婦人記者によくあるちつとエクトリックなタイプで、どちらかといえば無関心派だ―が反駁した。

「そうはいうけど、やはり貧乏感は強いじやないないかな。自家用車をもつている人はそれなりに新車に買い替えたいと思うだろうし、T君の欲望はみみちすぎるんじやない？」

これは平均年齢三十七才平均賃金六万六千円、組合員数二百二十名という、ある出版企業の労仂組合での話でる。

読者の多くは、この話を「労仂貴族」のたわごととと受取るかもしれない。日本の労仂者の現状のなかで、このホワトカラーの組合の状態はまことに恵まれたものであるかもしれない。だが、果してそうだろうかNHK労組がノーマル・ベース」）「健康にして文化的生活」のNHK労組的表現）を維持するには、どの位の賃金が必要かと計算した結果、三十八才で十万円弱という数字が出たという総評だかの理論生計費によると、それよりもさらに多く、たしか同じ年齢で十五万円位だつたと思うこの数字からすれば、平均賃金六万六千円は少しも高いことにはならない「ノ。マル・ベース」の六割六分だから「アブノーマル・ベース」である。この「アブノーマル・ベース」があたかも「高賃金であるかのように錯覚されるほど日本の賃金水準は低いということなのだところで問題はなまじ他の労仂者の賃金水準など知つている組合活動家の方かこの錯覚におちいりやすい、ということだ。Tはその一例である。彼らは、口では低賃金、高要求を掲げるが腹の底ではいくらで妥結したらよいかを考えている。一方、世間相場にうとい、組合活動に無関心なものの方が、自分自分欲望にナチコールである。Fがそう一例だ。

賃上げ闘を経済主義と軽んじ賃上げ闘に熱心するのを物取主義と侮蔑する風潮がある。左翼的な組合活動家にこの傾向がとくに強い。これは日本の左翼に伝統的な禁欲主義の影響であろう。なにか理念のために斗う方が高尚で物質のために斗うのが底級だという気風が、日本の底賃金を支える一つの柱だつたといつたら逆説にすぎるだろうか。しかし、組合活動家が伝統的な禁欲主義から解放されることが、今後の組合運動の前進は必要なのではないか。下のような無関心派以上に自分の欲望にナチュールであることが新しい組合活動家の必要条件ではないだろか。

（大沢正道）

× × ×

大衆のなかの権力

田中良二

大衆の日常性からの権力論を、いわば疎外論風に分析してみせても、たえずある空しさにつきまとわれざるを得なものがある。

大衆そのものでなければならないが、同時に自分も大衆の一員であるという発想ほどゴウマンなものはないのだから。

「そういうお前は一体何ものだ⁉」という問いに刺されずには語れないところに大衆論のかかわりかたの持色があるのだから。

私がのべようとすることは、ただ体制的大衆破壊だけである。それは、自分をさらすことによって己れ自身を体制（権力）から抹殺されるざまを、どれだけ自分が背負うかということであり、何よりも私自身が日々このようにさされてきていることへの自分に対するやり切れなさを呪う情念の論理をじぼり出すことだけである

権力は大衆の日常性から疎外を基調として体制化しているのであってそれが例えば職場の中ではマジメ主義とでも呼ぶべき飼育された権力観のような典型として現われるのである。

さて、大衆という場合には、およそ次の二つ位相に何らか集約されるといえる

第一は、つねに「上から」の政治性（前衛とか、指導者とか又はインテリとから）の対象として、いわば支配大衆という図式のものとして把えられるもので、自己からみた「世間」というかたちをとった大衆である。

この二つが、私のいう体制的大衆の基本であり、両者の間をふれる振子のような次元をまだわれわれは超えていないのである。

大衆のためといいながら大衆とはそんなものだと逃げる両刀論法の中に身おき体制的秩序に流されていくのである。

この体制的大衆観の位相の根拠は政治的共同性と個人的日常性との本質的に対立するものを統一しようとする仮象の上に成立しているものであり、それは、日常性の中に個と対他の分裂が自らを政治的に疎外し、個人が共同性へと観念的外化され、国家なり体制への幻想的求心性（野田茂徳より）として、一方では個の生活への執着として、自らを疎外された大衆として形成していくのである。

従つてマジメ主義いうのは、政治性（幻想として逆立ちした）としての大衆をタテマエ論にとり、実際のホンネは個人的日常性の中に確たる自分をとりつけ秩序内に身の安全をおきながら大衆を保とうとする擬態意識であり、それは体制的権力に身をすり寄せる折的叡智の仇花であろう。

だから、支配者なり管理者を攻撃する場合にただ彼らの日常のグウタラさを突くだけであつて権力自体への職場での斗いをくめないのである。何故なら攻撃者自身が秩序内の思想しかもち合せてないが撃てないのが当然である。あの何ものへ彼ら（支配者）からみれば、服従しているようで不満づらの沼のような多数の人間として映るのであるから蔑視しながらおだてるべき操作する対象としての大衆であり。

第二は、個人的日常性（自分も大衆の一員であるという意識をもつて）の現実過程として、いわば生活として政治とは別の相とみ、

労仂者と工場と革命

「労仂者の完全な従属は工場の構造に基づくのであつて、所有制度に基づくのではない。」

労仂者の解放がされるのは工場内における一切の抑圧機構が粉砕され、労仂者自身の立場から考案された生産構造が、それにとつてかる時でしかない。

イギリスでは一八〇〇年、議会において最底賃金法が否決されるや労仂者は鉱山にはいてゼネスト、織物工業地帯において大規模なストを展開した。

さらにナポレオン戦争が長びくにつれ、資本家が軍需景気で肥えたのに反し、労仂者物価騰貴のため食うことすらできなかつた。

一八一一年から一二年にかけ、ついに労仂者の機械破壊運動は頂点に達した。

これは労仂者の本能的反抗でしかなかつた。それ故この反乱は労仂者の流血の中で沈黙させられた。

しかし我々はここにハッキリと見ることができる。

機械（工場構造が労仂者を従属させているが故に労仂者は機械の破壊を通じてのみ資本家に反逆できるのだと労仂者自身が考えたのだいうことを。

現在マルクス主義者は私有財産が消滅すれば、それで革命だと思つている。だが労仂者にとつての革命とは一にも二にも労仂の苦痛をなくすものでなければならない。

ソ連や中国におけるスタハノフ運動は、労仂強化以外のなにものもない。これは第二次五ヵ年計画完遂するために利用された。スタハノフ運動（労仂強化運動と読め⁉）の起こる直前に、切符制度が廃止され、それ以前から進められていた賃金制度の強化が。労仂意欲の刺げきという名目のもとに、ます〳〵強化された。スタハノフ運動とは、つまるところ「合理化」のことである。

労仂者の解放は、労仂者自身によつて、生産構造が改革された、その改革された生産構造が、社会生活の基盤をなすということであるそれ故に、労仂者が議会や政党に望みをかけている限り、労仂者は永遠に解放されない。なぜなら諸政党の目的は、ただ〳〵生活水準を高めて、物質を豊富にすることであつて、労仂の苦痛をなくしたり、自由な時間を多くすることではないからである。

労仂者が生産構造を変革するためには、資本家の打倒が絶対に必要である。資本家を打倒することによつて一切の無用労仂がなくなりそれら莫大な労仂力が生産に向けられることによつて苦痛のない労仂が行われ、この労仂を基として社会を構成することができるからである。

それと同時労仂者は、労仂者を永遠に機械の奴隷とするような、あらゆる意図を粉砕しなければならない。つまり、知識人や組合官僚による政治を拒否し、いかなる政治権力をも粉砕して労仂者自身による生産管理を完遂せねばならないのである。

労仂者同士に権力は不要である。権力を必要とする者は支配者である。それ故、労仂者は支配者の権力の基盤である工場を、自分たちで管理することによつて、権力を消滅させることができるのである。

（池田和義）

イオム通信

姫路市亀山三五四　向井孝

（つづき）

だから、それはちょうど逆に考えればよいのだ。即ち「文句だけいってやらない」「立場になればその気にならない」「公私は混同すること」

大衆論にみる政治性と日常性の問題は、本質的には、両者を仮象の接木としがとり得ていないぼどに、まだ、われわれが政治権力の疎外前史としての屈じよくから脱却していなことを示すものであり、それは、個人的日常性から政治権力を打倒していなほとの権力論しかもたなかつことの証明でもあろう。（以下次号）

労仂評論　背后で支配するもの

最近、日本の労彷組合運動が右傾化しつつある現状について、いろいろと取佐汰されている。いわゆる総評の危機と言われ、民間産業労組の弱体化であるが、合化労連の分裂傾向、鋼鉄労連のIMF・JC加盟がそれである

そして、このような現象のよつてくる原因を一つの潮流の擡頭であるとか大企業間の合併に伴つてひきおこされつつある大企業間労組の形態である（平和と社会主義）と言われているけれども、そしてこのような原因が全くないとは言わないけれども、例へば、鉄鋼労連のJC加盟に至る内情をもつとリアルに見れば判るように経営権力の威力が大きな背景をなしていたのである。経営者によつては労組の中に執行部に対立する反共グループをつくらせ左派幹部や青年活動家を配置転換に乗じて職場を迫放し、一ところに集めてその活動を封殺した。一方反共グループは虎の威を借りたキツネよろしく、大々的に反共宣伝を行うと共にJC（国際金属労連日本支部）を支持した。組合員は、このグループが経営権力につなつていることを知つていたから表面切つて批判せず便所の中での落書の批判が激増したのである。あわてた経営者は、いそいで便所の壁を黒くぬつて落書を防止するいう有様であつた。

しかじ、このような抵抗は結局、日和見的な結果しかもたらさず、充分な職場討議すら経ずしてJC加盟に向つたのである。鉄鋼各社のこのような労仂政策の中には。労組のJC加盟に資本が好意的に協力している（平和と社会主義）と述べているような、それこそ好意的皮相な見方ではなく、その権力主義的な（またある時には買収主義的な）やり方の中にこそ、やがては軍国主義再建へのルートとつながるものがあるのではないかという危惧が感じられる。こゝにこそ今后の問題点が存在するのではあるまいか。

（中川）

今年のメーデーに参加しビラを配布、創刊号を販売した労仂と解放社のメンバー　（会場は神戸市東遊園地）

石川淳氏の推薦の言葉　これほど強烈な精神を、とうしてわれわれの現代史はよそに見て、あるいは見ないふりをしていらたのか。人民の損害に於て、歴史は今までユガミにふらついて来なもはやサギだの怠慢だのの季節ではない。見よ大杉栄全集。この出現は未来にむかつて自由の実弾をぶちこむべき事件である。

大杉栄全集
東京都文京区春日116
振替・東京12442番
現代思潮社

（当社発行所で受次ぎます）
〝科学〟から自由へ
著者 チャールス・マーティン　訳者 遠藤斌　発行者 高橋光吉
発行所 東京都渋谷区幡ケ谷三ノ一二
地六社
価二五〇円　振替番号東京四七九〇八

貧しきものの闘い

アナルシー（A.O.A機関誌）から

十九世記フランスにおける労仂者のたゝかいを理解するには彼等がおかれていたその当時の状態を知る必要がある。

賃金労仂者は搾取者の奴隷であつた。労仂者は週一回の休みも無く、一日十五時間から十六時間仂き通しで、寒さをしのぐ暖もとれず、あかりもない地下室やあばらやで生活していた。子供達は八才の時からこき使われた。当時の人々の貧困のすさまじさは、ビクトル＝ユーゴーによって克明に書き残されている（レ＝ミゼラブル）一八三一年リヨンの絹布職工（カニュ）達は、そのみじめな状態に対して立上つた。暴動は血でいろどられた。それは人民の父であり、保護者である事を願つた（自己流）〝市民王〟ルイ＝フィリップの統治下であつた。

男二フラン、女一フラン、八才から十二才の子供が四〇〇人がストライキを決行した。九月二九日に、荷造り職人が一日の就業時間を夏季十一時間、冬季十時間とする要求を提出した。機械化は失業者をふやし、労仂者解雇反対運動も烈しくなった。

一八三四年四月九日、リヨンにおいて、ゼネスト責任者の裁判に対する抗議デモの最中、兵隊がデモ隊に発砲したのをきつかけにして、たちまち市街戦に発展していつたが、十一日に至つて暴徒は打ちのめされてしまたのである。

一方パリでは、リヨンの蜂起にこたえて、人権協会の一部の国民義勇兵が、ボーグール通り、ジョフロイ＝ランダパン通り、オーブリー＝ブジエ通り、オーズルス通り、モーブエ通り、トランスノナソ通り、グルニエ＝サン＝ラザール通りにバリケードを築いた。それに対し四万人兵隊と恐るべき大砲が彼等を鎮圧するために送られて来たパリケードは中央市場地区を通つてサン＝メリー修道院に達する曲りくねつた路地の中に作られていた。四月十四日午前六時、ラスクール将軍が、モンモランスイ通りトランスノナン通りミシェルコント通りを攻撃している間に、別の隊がサン＝メデリック通りベリ通りを占領した。四個中隊が家々の戸を破り武力で、モーブエ通りボーブール通り、コロフィエ通りを攻略し、サン＝メリー修道院を包囲したビジョー将軍は兵隊達に云つた『諸君情は無用だ、三千反徒を皆殺しにしてしまうのだ』、トランナン通り、たけり狂つた兵隊達は、戸を突破り、家の中に突進し、女、老人、子供を虐殺した。第三五小銃隊がトランスノナン通り十二番地に押し寄せた。

ベット中の若い男に発砲して傷け、その上四十回も銃剣で突いて殺した彼等は偶然その場に居合せたドビニイと今一人の男を殺し、死体をまたいで二階へ上つた。ユイという男を殺し四才の子供を傷け、六才の子供を剣銃でつきさした、三階では、一人の老人、ブレフォル、アンネット＝ブゾン、それに若い母親を殺した。四階、五階、六階と五人を殺した。目撃者は「椅子の中のワラを突きさしている様に、体を突通る剣の〝フルュー、フルュー、〟という音がきこえた」と語つた。

彼等は大勢の人々を逮捕し、警視庁に連行し、人々を散々足でけったり捧でなぐつたりして、そこでも多数の人々殺した。

ビジョーは〝トランスノナン通りの屠殺者〟の異名を頂載した。

トランスノナン通りの事件は、労仂時間の短縮と賃金引上を要求した労仂組合と共和主義者の行動の結果であつた。しかしこの事件で労仂者階級敗退し、闘士達は散りぢりになつてしまつた。

一八三九年五月十二日、オーガスト＝ブランキーの助力でもつてさえ、パリ市民を蜂起さすには至らなかつた。

一八四〇年の経済恐慌の下ではストライキが続出した、労仂時間の短縮、賃金値上げの目標は常に変らず服職人三、〇〇〇人を始めとする壁張職人、靴工、石工、車大工、錠前師等のストライキが絶えなかつた。

第二共和制のもと、一八四八年二月、臨時政府がやうやく労働法に着手したのである。ルマ＝ブランを議長に、労仂委員会は三月二日から四日の会議において一日の労仂時間をパリて十時間、地方で十一時間と決定した。

イギリスでは、一八三四年の始めに、全国労仂組合大連合が一日八時間獲得のためのゼネストを決行した全国労仂組合大連合はジョン＝ドーアテイ、ロバート＝オーエン、ジョン＝フィールディン、によって指導され「議会に提出ナる事なく、一日八時間を労仂者自身でかちとれ」とイギリスの労仂者に呼びかけたので

歌心随想（二）

笠原　勉

杉よ眼の男　更生の霊よ
黒旗は汝と共に香る。

これは大坂の黒パン社から出ていた本に掲載されていた大杉栄の弔歌中浜鉄のものだと思ふ

ブルヂョアの庭につゝじが咲いているプロレタリアの血の色をして。

これは裁判とは愚劣なる芝居だと云つて、死んでいつた朴烈と獄中結婚をして怪写真問題として一時新聞紙上をにぎわした金子文子の短歌作品である。

反逆のたゞ一すじ生きしかな　わが愛すべき　正気の狂人。

これはたぶん後藤謙太郎君のものだと思ふ、私は妙な理屈よりも素朴に心にとまるこの種の詩歌が好きである。

ストライキ　汗する者のまた散けとこぶし握りて空を打ちみる。

そうだ兵庫塚本通りにあつた、総同盟の神戸連合会がそのまゝ日本労仂組合神戸地方評議会と変つた頃は少しは様子の解つた闘士達の仲間いりをしていた、無論最年少者の方であつた、当時同年輩の者として岸本茂夫、笠井繁雄、堀宇一、三木一雄広畑、君等々がいた。

その頃世間は不況下にあつて大正の末期頃だ、西神戸を中心として各ゴム工場では工場のさ閉縮少が相次いて、種々労仂争議が起きたまた電車ストライキと称する、その頃の大阪市電を始め阪神電車神戸の電鉄などと相つぎ、ストライキが起きた。

後年私と起居放浪を共にしアナキズム陣営中にあつて人生を論じ社会を語り合つた親しい仲間の一人西浦恨さんは、兵庫電鉄の争議の犠牲解雇者の一人であつた。その頃には十年労仂争議の最高指導者の一人であつた賀川イズムは「死線を起えて」の出版を頂上に凋落をたどつた、そして普選運動とからみ、神戸地方評議会にも政治研究会なるものが生れ、議会主義を唱える者と、それを排撃せよとする、サンジカリズム理論の風調を見るにいたつた。この事は何か？大会のをり関東の代議員の中から強調されたのが、きつけになつたと思ふ。丁度その頃でなかつたろうか、当時の闘士活動家分子に依つて赤衛団なるものが生れ、前衛的な役割を果たしていた。大阪にもその頃野武士組と称して、神戸赤衛団とおなじ様な団体が出来、野田津太君などが代表していたかの様に聞いた。

いち早く吾等が群にルパシカを着てバクーニンを説きし友はも。

註（ルパシカ）ロシヤ労仂者農民の服

神戸厨同盟なるものに籍を置いていた船員K君、と私は非常に仲良くしていたどちらか云い出したのかは忘れたが当時阪神沿線に居住していた、山川均氏を訪ずねて見ようぢあないか、と云う事になつたその頃こうした事には一寸勇気がいつた、行きは良いよい、帰りはこわいで、丁度山川均さんの宅の前に、犬小屋つまり当時の警察が家を借りていていつも刊事が二、三人いて張番をして訪門者があれば、必ず検束をして何処の何者、何用で参つたと云ふ具合で、取調べをうけた住所職業のはつきりしない者は不浪罪とかで二、三日長いければ一週間ぐらいの止置きを喰つたものだ、それをあらかじめ聞いていたのでK君と二人相談しあつて帰りには右と左に別れて走らうではないかと決めた。

山川均さんはその頃体がすぐれないと云て私が行つた時は床をのべられ休んでいられた、私とK君が何かと質問してお答を頂載した記憶に残つている事は資本主義と云ふ大きな壁をキリで穴開ける様な事をしていては駄目だ大きな力にしてその壁を打破れるほどの力にまで、とつまり組識と団結を説いてくれたと思ふ。

察の方ではそうした事が度々あると見えて右と左に走だつたが結局芦屋駅だつたとかと思ふ私服のポリが張り込んでいて変んだと感じる奴を一寸待てゞ捕まつてしまた事をおぼえている

こゝで当時、唄つていたロシヤ革命の歌の一節こ記して置こう

亜細亜に続く　北欧こ
ロシヤの民を君見づ
専制の雲　切り開き

自由の光り仰をがんと
ある日は　村に工場に
叫びし自由　黒海の
高鳴る波もものあらず
熱き血しをに色どりし
反逆の文字とこしえに
ウラルの雪にきざまれぬ

それは神戸連合会の二階であつたしきりと誰かゞにしやべている様なので私は二階え上つてみた、すると深江君がしきりと演説口調で本を読んでいるのではないか、

座つているかと思えば立ちあがり壁に向つて軽ゼスチャア交えて「野に咲く一輪の花、故なくして咲かざるがごとく」当時神戸連合会唯一雄弁家と云はれていた深江君か私が二階に上つて来た事も意に解せずしきりとやつている、その姿を彷仏として想出する事が出来る。

×

黒色自由労仂者組合と AC労仂者連盟の思い出

横倉辰次

組合の発端

このよな黒連（前田淳一上田光慶北浦狭）の暴力沙汰を慣慨したのは近藤憲二だけではなかつた。それよりこの黒連前田一派にアナキズム運動をまかせて置いては単にリヤク屋と不良少年的行動しかできず日本アナキズム運動の前途は憂うべきものになるとはいえ、革命的アナキズム運動は青年の力によるより外はないとすれば黒連以外の青年集めてもつと正しアナキズム運動を展回するより仕方があるまい、と考え、それを実行に移したのが武良二であつた。

この武良二に共鳴したのが「野蛮人社」なる思想団体を五六人で結成していた村上義博であつた。「武さん、芝浦で自由労仂者をしている七八名の真面目なアナキストがいます、僕達「野蛮人社」を解体して、その人達と新しい団体を作り本当の組織活動をしようと思いんですか」と相談した

「是非やろう、黒連に対抗し、いやもつと立派な青年アナキスト連盟を結成しよう、リヤク屋でなく労仂者達、自由労仂者なり理想的なアナキストの組織が出来るよ」

武良二はよろこんで幾度か芝浦の者達と会い、談合して、AC労仂者連盟なるものを結成することになつた。

これを知つた前田淳一一派が、分裂行動、裏切行為だ、許せぬと武良二を黒連事務所（麻布町）に呼び込んで詰問し、例によつて暴力沙汰になり、当時まだ若くてげん気な武良二と取組合になり、若い前田がかろじて武良二を阪打した。同行していた村上義博は相手は多勢なので手を出さずにいたが、村上の腕力と勇敢さは定評があつたので、村上とめには入つたが、制裁されずに無事、麻布田の横にあるAC労仂者連盟の事務所に急行して、この由を告げると、皆はイキリ立つて叫んだ、「よし、黒連の事務所に殴り込め」「行くことはない、あつから来るといつていた」

「よ、ござなれ、不良少年共、土方の腕前を見せてやるぞ、自称思想家と労仂者とどうちつちが強かやってやるぞ」

皆はそれぞれ武器をととのえて手でぐすね引い待構えるのだつた。だが、黒連は来襲しなかつ。武良二を殴打して満足したというより、前田淳一の行為に全員が共鳴し心服していなかつたこともあるのだろう、前田にしても少人数で自由労仂者を襲撃する勇気はなかつたようだが、その後気強良二夫人が詰問に行つたのに対して、夫人にまで暴力揮つた。

このような暴力沙汰があつてからAC労仂者連盟は正々堂々と名乗りをあげ、その運動手段として黒色自由労仂者組合を創立した、だが残念な事には指導的立場の武良二が前田淳一の暴力に屈したわけではないが運動に厭気がさしたのか、運動から逃避して上海へ去つてしまんつた。（この逃避に武良二の性格らしい今日に至つてもなおつでいなようだ。先輩武良二のために惜しむ）

だが指導者を必要とする程にAC労仂者連盟はび弱ではなかつた。

黒色自由労仂組合の看板をかけると直ぐ総員で宣伝啓蒙活動を開始した。

当時の組合運動というのは、今日とは大分差異があり殊にアナルコサンヂカリストに至つては異つていた日常斗争さえも否定していたのだストライキなども今日の如く周期的に賃あげのために安易には出来なかつた。

ストライキは労資の決戦であり、資本家や警察の弾圧は、今日では想像もおよばぬ程で、ストライキは完全勝利を得ぬば馘首、そして失業につながつていたのだ（勿論六ケ月の失業保険などなかつた）又、組合も労仂者の生活を守るのが主眼ではなく革命への準備行動であり、革命後の社会制度の母体のモデルケースとして組識、制度を作ろうとしていた。それゆい中央集権主義排撃し、職業別、単一企業組合より地方別組織を理想どしていた。それに各地域の労仂者が結集して革命に際して革命軍としての準備がなされていたのだ

自由労仂者組合は、普通の月給取の組合員以上に果敢に革命に対して意識し、心構えを持つていた。当時はよく労仂貴族という言葉が使われていたし。

前述の如き激しいストライキに対しても、「よい御身分だ、ストライキが出来るなんて、俺達はストライキするなんて職場がない、賃銀の要求は即日即決だ」と云いつてた。

事実、日当の取決めは、毎朝、就労前に交渉して決められた。（常用でない受取り仕事、小間の場合のみだが）

この交渉は激しいものだつた、短期決戦のストであり馘首も許されなければスキャプでも許さぬ、抗争であつた

このような難事がなされるのは、労仂者の結集と革命イデロオギーが相手を納得させるだけのものがあつたからだ。

自由労仂者組合員は、常に革命に際しての尖兵であることを自任し、そのような人生観を保持していたのだこのようなムードの中で黒色自由労仂者組合はちみつに活動を開始したのだ。

平山房子・訳

日本アナキスト連盟（機関紙）
自由連合
発行所　自由連合編集局
東京都新宿区北山伏町三三
（大沢方）